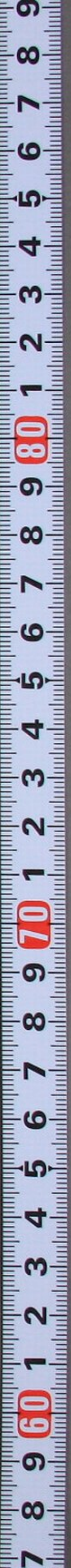


首書

源氏物語

橋姫
四十五





四
十
五

八幡

○我内としこ 或柳 弘徽殿の威勢の時也

○わすけの 細 ぼた方といふ

○ゆめつばく 細 ぼたの類親 けうくやうき

○くろやま 万水 八宮の京の宮寮上也 万事
ききつらうきとくき

后のふらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

このまをせせせせせせせせせせ

くづいぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

○よりわろ山里 弄 宮の山庄也 是れ八宮の註也

○わろのまき 或柳 宇治のまき

○わろのまき 或柳 宇治のまき

八幡

○ろりりへの孟冷泉院の勅定也

○少りやハ孟惟君一ちと冷泉院へまうせ
せよりしと

○母院のいしハ細冷泉院の注より也

○朱雀院の細院の心也入道の宮れよりと
世三宮とほ成よあきほひしと

○中く乃みの細董の心也出家よりしハ八宮の心
としと心よりしと

○あそりのよりハ世換わより入の八宮へなく董の
心言信あり也

○足しハ河冷泉院の心也院号ハ後とれとも
はさよ院の心也ありつれハ心の心也
ありつてまとも 或換ひよりハ心言信ハ又ハ
文もありしと

○入つてまとも 世換わの心也無曲ハ心也

ろりりへののわらりよまひあ
ての世の心言信たらし
しと心よりしと心言信
の心言信の心言信
が心言信の心言信
まづも心言信の心言信
ハ心言信の心言信
この心の心言信たらし
が心言信の心言信
心言信の心言信ハ心言信
の心言信の心言信ハ心言信

あひひひひひひひひひひ
ろりりへの心言信たらし
の心言信の心言信ハ心言信
が心言信の心言信
まづも心言信の心言信
ハ心言信の心言信
この心の心言信たらし
が心言信の心言信
心言信の心言信ハ心言信
の心言信の心言信ハ心言信

世とてよ哥 院也 并冷泉院の世とてよ
のともちよるハ八宮の中方より一とてあやま

○此の使を 細聖ともい言傳わりて世哥とて
別よ使よそまのせぬ也

○このわたり 或抄大いなる人より使
よ院よりの使をわいよるいぬ也

○まろくよ 石水真あつやうれゆりてまや也

○わく絶て哥 八宮也 世抄のうらよ宿とて
るう真實心のとも道心よいぬれも
細我身二筋よ世間とわいよるあつやうれ
喜撰の哥よりよるもまのめも結句真實

の道心よりよる出でりぬの高光り雲の八重一と
ハ住うしとらる類なりし
○ひらののこを 細院やうと迷懐の有やま
長よみん一とらる也

○中將君の 孟董のものとめまハ八宮よる
ゆしぬ也

○法文さの 或抄 是よりよるのFぬも也

○まろくよ 世抄 世とてよるの
ちよるいぬれもまのめも結句真實

世とてよるいぬれも
まのめも結句真實
はりかちりこの所し
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實
まのめも結句真實

ひらののこを
細院やうと迷懐の有やま
長よみん一とらる也
中將君の 孟董のものとめまハ八宮よる
ゆしぬ也
法文さの 或抄 是よりよるのFぬも也
まろくよ 世抄 世とてよるの
ちよるいぬれもまのめも結句真實

Handwritten text at the top of the right page.

○わんろふの花 可なり不足なるを

○わんろふの花 可なり不足なるを
○世中よりわんろふの花の可なり不足なるを

Main body of handwritten text on the right page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

○わんろふの花 可なり不足なるを

○わんろふの花 可なり不足なるを
○世中よりわんろふの花の可なり不足なるを

Main body of handwritten text on the left page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

○こしやくとて并 董の心せとちりて也
 或は八官の歌の發明よりあるものも董の奇
 特と也

○のうれき 花法の用也

○うらたよ 孟 八官と董と

○ふつうとも 細 董也

○せつこくへり 孟 董の心也

○とくへり 細 ちりてとせつこくへり也

○いしめき水の水の 細 宇治のこころれとて風
 ゐを吹くやいりてとて殊勝也

○いづれはとて 阿ら川の波花とて夢とて
 てとて 姫のやれとて 眞入云出 奇同時
 奇も不可為 證奇とて

○りてとて 孟 浮圖の来下とて三宿 前註
 らとて 任もこのとてとてやうとて也

○りの帯れず 万水董の心とて姫若とてとて
 とてとての心かとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとて

〇とくへり 細 ちりてとせつこくへり也
 〇いしめき水の水の 細 宇治のこころれとて風
 ゐを吹くやいりてとてとて殊勝也
 〇いづれはとて 阿ら川の波花とて夢とて
 てとて 姫のやれとて 眞入云出 奇同時
 奇も不可為 證奇とて
 〇りてとて 孟 浮圖の来下とて三宿 前註
 らとて 任もこのとてとてやうとて也
 〇りの帯れず 万水董の心とて姫若とてとて
 とてとての心かとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとて

〇とくへり 細 ちりてとせつこくへり也
 〇いしめき水の水の 細 宇治のこころれとて風
 ゐを吹くやいりてとてとて殊勝也
 〇いづれはとて 阿ら川の波花とて夢とて
 てとて 姫のやれとて 眞入云出 奇同時
 奇も不可為 證奇とて
 〇りてとて 孟 浮圖の来下とて三宿 前註
 らとて 任もこのとてとてやうとて也
 〇りの帯れず 万水董の心とて姫若とてとて
 とてとての心かとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとて

佛の空とては弁姫君のちのこに持佛は方の障子とてとちうへう也

○あられ 細 涿也

あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは

○あられ 細 涿也

○あられのこころは 花 優婆塞の梵語唐土翻して近事男といふ俗に佛の道を行きとる人も佛の四部れ弟子の其一也賀茂後公は角年廿二うして家とてゐて葛城山へ入て藤の皮とをちて松の葉と食して孔雀明玉の呪とて終よ仙術とて鬼神とて久しう是と彼の優婆塞と名づく山伏の行は是よりとちうへうとて六帖とてとちうへうとて山の権うかゝるもとてとちうへうとて

あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは
あられのこころは

○あられのこころは 何 宿徳也
孟 何の僧都僧正
○あられのこころは 石水やうとて

○此の中 細一紙邊き野中しく不用之
 茂木の中とくし 河内を論議あり暨

○此の中 万水心りさくはあてらる也

○山下風は奇 薫也 細名なふみり
 心也 花後成御奇 ありしや案の本業目
 入てもうくふりや我るここは世傳氏の奇
 としてよふんたり

○柴のまらりと 弄家くの柴の垣をいひはれ也
 細道とくれを也

○此の中 河内をくたはしき秋の
 ともはらひさくはくはくも

○この中 或抄 結の工をいひはれ也
 託巻とし筆としを不分明也

いづらゆきしるゝ
 たりしるゝ
 しるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ

いづらゆきしるゝ
 たりしるゝ
 しるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ
 らるゝ

○このしらべ 孟董の心也ハ宮の心也
○この心也

○いこのしらべ 巴抄 琵琶のしらべ
○このしらべハ筆のしらべ

○この心也得やうとてハ別の心也
○ハ黄鐘調ハ笛の黄鐘と比巴の風香調也比巴の
黄鐘よめんとい比巴ハ風香調返風香調ハ秘
曲の揚真操流泉等曲也仍以此調子寫先比
巴の黄鐘調ハ笛の平調よめん也 下略

○このしらべ 細 近くあるよとてハ
巴抄 中君也

○このしらべ 侍りし

○このしらべ 孟董の心也ハ宮の心也ハ念佛よめん
○この留まよわとてハ

○このしらべ 孟董の心也斟酌也

○このしらべ 細 心の心也

まはらけのしらべ 孟董の心也ハ宮の心也
のしらべハ筆のしらべ
ハ黄鐘調ハ笛の黄鐘と比巴の風香調也比巴の
黄鐘よめんとい比巴ハ風香調返風香調ハ秘
曲の揚真操流泉等曲也仍以此調子寫先比
巴の黄鐘調ハ笛の平調よめん也 下略

まはらけのしらべ 孟董の心也ハ宮の心也
のしらべハ筆のしらべ
ハ黄鐘調ハ笛の黄鐘と比巴の風香調也比巴の
黄鐘よめんとい比巴ハ風香調返風香調ハ秘
曲の揚真操流泉等曲也仍以此調子寫先比
巴の黄鐘調ハ笛の平調よめん也 下略

○まろやと 細董のよひ入しぬせ

○まろやち 巴敷 事也琴とていふなり

○まろやひか 細董のよひ入しぬせ

○まろやふ 細よのや入のり

まろやち 巴敷 事也琴とていふなり
まろやひか 細董のよひ入しぬせ
まろやふ 細よのや入のり
まろやち 巴敷 事也琴とていふなり
まろやひか 細董のよひ入しぬせ
まろやふ 細よのや入のり
まろやち 巴敷 事也琴とていふなり
まろやひか 細董のよひ入しぬせ
まろやふ 細よのや入のり
まろやち 巴敷 事也琴とていふなり
まろやひか 細董のよひ入しぬせ
まろやふ 細よのや入のり

○まろやち 或敷 八宮のよひ入しぬせ

○まろやふ 細董のり

○まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ

まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり
まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり
まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり
まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり
まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり
まろやち 或敷 坊のよひ入しぬせ
まろやふ 細董のり

○あまのこ 孟世よめ人の知也後のけしや
はんとしひらうて是よりとて一也

○竹のよりの 河 五架三間新草堂石階松柱
竹編塼 自氏文集

○しへんや 弄との舟人れ心不可然事也
君しつれうもひれ善悪と人よんや
不忠也

○まねてりり 万水ぬきとる也
とてまねてりり 近江君とてりり

○まねてりり 或ぬきとる也
とてまねてりり のまねてりり

ひより 細 大君也

○手まねてりり 河 後撰 元良親王の住りきり時
るのてまねてりり 入るるもまねてりり
雲うれりり 何あふりり 月月の雲う
とあふりり 人のひりり 秋のよれ月
と君の雲うれりり 月月の雲う

○扇のて 河 伊行尺八入 月隱重山号 敬
扇喻之止観 下略 花招月と云ふ詩を
つわり入日と人と檢し云ふとあれ 月と招と
る心る人し 弄 月と扇と云ふ

あまのこ 孟世よめ人の知也後のけしや
はんとしひらうて是よりとて一也
竹のよりの 河 五架三間新草堂石階松柱
竹編塼 自氏文集
しへんや 弄との舟人れ心不可然事也
君しつれうもひれ善悪と人よんや
不忠也
まねてりり 万水ぬきとる也
とてまねてりり 近江君とてりり
まねてりり 或ぬきとる也
とてまねてりり のまねてりり
ひより 細 大君也
手まねてりり 河 後撰 元良親王の住りきり時
るのてまねてりり 入るるもまねてりり
雲うれりり 何あふりり 月月の雲う
とあふりり 人のひりり 秋のよれ月
と君の雲うれりり 月月の雲う
扇のて 河 伊行尺八入 月隱重山号 敬
扇喻之止観 下略 花招月と云ふ詩を
つわり入日と人と檢し云ふとあれ 月と招と
る心る人し 弄 月と扇と云ふ

あまのこ 孟世よめ人の知也後のけしや
はんとしひらうて是よりとて一也
竹のよりの 河 五架三間新草堂石階松柱
竹編塼 自氏文集
しへんや 弄との舟人れ心不可然事也
君しつれうもひれ善悪と人よんや
不忠也
まねてりり 万水ぬきとる也
とてまねてりり 近江君とてりり
まねてりり 或ぬきとる也
とてまねてりり のまねてりり
ひより 細 大君也
手まねてりり 河 後撰 元良親王の住りきり時
るのてまねてりり 入るるもまねてりり
雲うれりり 何あふりり 月月の雲う
とあふりり 人のひりり 秋のよれ月
と君の雲うれりり 月月の雲う
扇のて 河 伊行尺八入 月隱重山号 敬
扇喻之止観 下略 花招月と云ふ詩を
つわり入日と人と檢し云ふとあれ 月と招と
る心る人し 弄 月と扇と云ふ

○あらまゝも 或抄 ころもくハ物のけさういふや
はるしつハ老人いぢひてころもくハ
上の知は姫君のけさうもぢひてころもくハ
○本丁のころもく 万水 舟う董とのころもく

○母世の外ハ 或抄 佛の異香ころもくハ

○ころもく 細老人のけさうのころもく

○ころもく 巴根 柏木と三宮と密通の

○ころもく ころもくハ物のけさういふや
はるしつハ老人いぢひてころもくハ
上の知は姫君のけさうもぢひてころもくハ
○本丁のころもく 万水 舟う董とのころもく

○ころもく 細 華の世酒ころもくハ

○ころもく 細 華の世酒ころもくハ

○ころもく ころもくハ物のけさういふや
はるしつハ老人いぢひてころもくハ
上の知は姫君のけさうもぢひてころもくハ
○本丁のころもく 万水 舟う董とのころもく

。釣りも哥 董也 細折節のよなせ
河 槇尾山 宇治也山城首 椎本よまことの山へとも有

。うらうら 弄 非君のいふよききりうらせ

。ゆくり 巴 袂 とも世房衆董へともゆり

。例のいし 巴 袂 非君也

。雲のわろ 哥 非君也 巴 袂 ともあつのまゝ
哥もや八宮寺のりりのるりていふいふいふ

自他景氣の哥もいふ

。うらうら 巴 袂 董のい

。きりうらうら 弄 董のいともいふ又宮中と
又うらと長也

。ひとあつて 或 袂 直面

。中くうら 孟 董の初也

。世の人わいて 弄 董と大くの世の人わいていふ
とていふうらと長也

あうらうらもいふうらうらもい
せり

釣りも歌のいふよききりうらせ
河 槇尾山 宇治也山城首 椎本よまことの山へとも有
うらうら 弄 非君のいふよききりうらせ
ゆくり 巴 袂 とも世房衆董へともゆり
例のいし 巴 袂 非君也
雲のわろ 哥 非君也 巴 袂 ともあつのまゝ
哥もや八宮寺のりりのるりていふいふいふ
自他景氣の哥もいふ
うらうら 巴 袂 董のい
きりうらうら 弄 董のいともいふ又宮中と
又うらと長也
ひとあつて 或 袂 直面
中くうら 孟 董の初也
世の人わいて 弄 董と大くの世の人わいていふ
とていふうらと長也

あうらうらもいふうらうらもい
せり
釣りも歌のいふよききりうらせ
河 槇尾山 宇治也山城首 椎本よまことの山へとも有
うらうら 弄 非君のいふよききりうらせ
ゆくり 巴 袂 とも世房衆董へともゆり
例のいし 巴 袂 非君也
雲のわろ 哥 非君也 巴 袂 ともあつのまゝ
哥もや八宮寺のりりのるりていふいふいふ
自他景氣の哥もいふ
うらうら 巴 袂 董のい
きりうらうら 弄 董のいともいふ又宮中と
又うらと長也
ひとあつて 或 袂 直面
中くうら 孟 董の初也
世の人わいて 弄 董と大くの世の人わいていふ
とていふうらと長也

○まづさる哥大君也 細姫君我身の上を悉
つひにわたり也今案三句ハ薫の方を以て三
句以下姫君より人さうし
○かまへて河さてもさりのまよふも
ゆへはあはれもあはれやうか
○まかま 或歟 まかハ正跡也まかまハまかま
あつら 姫君の跡と薫の心也

○くろくまへて 細八官よりあはれん時
薫の釣也

○老人の物語り 細くい太子の我身よ
さうりやうにねいひゆきやうのまらね也

○あひさるハ 細姫君さうのまら

○あひさるはさ 弄世を觀して心可見
巴抄世をさるわんよま治へてはて姫君よ
心うねり世上の人れ心を可觀

○えうて 巴抄 詞を撰て也

○うらつまらう 弄 薫の女れ詞

○とめゆりて 細くさうまきれ
はうし

さうりやうにねいひゆきやうのまらね也
あはれん時薫の釣也
まかま 或歟 まかハ正跡也まかまハまかま
あつら 姫君の跡と薫の心也
くろくまへて 細八官よりあはれん時
薫の釣也
老人の物語り 細くい太子の我身よ
さうりやうにねいひゆきやうのまらね也
あひさるハ 細姫君さうのまら

あひさるはさ 弄世を觀して心可見
巴抄世をさるわんよま治へてはて姫君よ
心うねり世上の人れ心を可觀
えうて 巴抄 詞を撰て也
うらつまらう 弄 薫の女れ詞
とめゆりて 細くさうまきれ
はうし

○ろろろ 何 無論 勿論也

○のやうな 弄 用よふらうかあしと

○さうして ぬ 細 八宮のせめりぬ也

○あひらうりし 或 抄 姫君よりの心也

○さうはせ 或 抄 八宮のせめりぬ也

○せよひて 孟 けひちちうりて 姫君よりの心也
さうはせ 董の口めりちと

○そのついでとて 弄 八宮の心 姫君よりの心
あつたて人の心いやくへん

細 抄 姫君

○さうして 董の心とて

○人よよよ 或 抄 八宮の心也 出家の身とて 姫君
よりの心とて 弄 用よふらうかあしと

○行まよとて 弄 董の心也

○さうして 弄 董の心也

○さうして 細 董の心也 等 困有る心也
巴 抄 嫁娶してはる心也

さうして 弄 用よふらうかあしと
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと
そのついでとて 弄 八宮の心 姫君よりの心
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと
そのついでとて 弄 八宮の心 姫君よりの心
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと

さうして 弄 用よふらうかあしと
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと
そのついでとて 弄 八宮の心 姫君よりの心
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと
そのついでとて 弄 八宮の心 姫君よりの心
あつたて人の心いやくへん
さうして 董の心とて
さうはせ 董の口めりちと

○木下木の世の 或按 董の初也

○細董舟君の初也又おろ人
あつめり也

○小侍従と糸と 細舟の君初
孟人よあつめり也

○物ころりく 或按 舟君下して初也

Handwritten Japanese text in a cursive style, possibly representing the first part of a poem or a story. The text is arranged in several horizontal lines across the right page.

○の初りもよ 弄 柏木の初也

○そやうりぬ 万水 柏木と廿三官の父ふ侍従
と舟ころりてはつりつりさうりし

○今ふのころめよ 万水 柏木臨終の時舟よ遺言
ちぬ

○うろ身 巴按 舟舟也

Handwritten Japanese text in a cursive style, continuing the text from the right page. It is arranged in several horizontal lines across the left page.

Small vertical text on the left margin of the left page.

Small vertical text on the left margin of the left page.

○佛の世に巴敷 佛の世に母の世に祈の叶はる

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

Handwritten text in cursive style, likely a continuation of the text above or a separate entry.

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

○佛の世に母の世に母の世に祈の叶はる

Handwritten text in cursive style, likely a continuation of the text above or a separate entry.

。この人も 或母 赤うまを西國にて死す也

。世官ハ父より 細 雅君と親類也

或母 赤うまハ元中弁として八官の右方の母方だが
らして世をまゝにすべし

。冷泉院の帝 細 致仕大臣女柏木の妹也

てまゝのうらみのうらみぞと
りてまゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと

。大山のわの河うらむと大山のわのうらむ
せし心ハ花よのうらむ
或母 宇治よ住とるへんがとるわらむ
。小侍従ハらう 世 兼 董のゆ存知かん

。例のゆきとそね 細 前よも物語とそ夜とあま
そて例のゆきと
。うらむハ 弄 董の語

まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと
まゝのうらみのうらみぞと

○ついでつ 或按 董の五六歳の時より

○ついでつ 万水舟のついでつ 柏木とまの
あやしいついでつとて 罪ゆふらん
○ついでつ 何 細く許 花他篇やうくまのついでつ

○ついでつとて 花うひて古くついでつとて

○ついでつ 弄 董のまゝとて 焼とて 下とついでつ
孟 廿三宮のついでつとて 焼とて 我のついでつ
と 柏木に 臨終の詞也

ついでつとて 花うひて古くついでつとて
ついでつとて 弄 董のまゝとて 焼とて 下とついでつ
孟 廿三宮のついでつとて 焼とて 我のついでつ
と 柏木に 臨終の詞也

○ついでつとて 或按 小侍従とて 渡とて 廿三宮へ 様
まのついでつとて

○ついでつ 別ま 細 西海まのついでつとて 私の 悲也

○ついでつとて 也 按 董の舟とて 入ついでつとて
何とて 入ついでつとて

○ついでつ の古くは 或按 董の心也
孟 老人とて 入ついでつとて

ついでつとて 也 按 董の舟とて 入ついでつとて
何とて 入ついでつとて
ついでつ の古くは 或按 董の心也
孟 老人とて 入ついでつとて

○ゆりうらふ 弄 柏木 今とのやとるれは三宮

○巴 楳の懐妊の夕 柏木は巴 臨終よめ久し

○ゆりうらふも 弄 世三宮の尼は成りつる也

○とうのわとの河 蒼顔見鳥跡 始て文字とほ

○ゆりうらふ 弄 柏木也 細いほど久し

○花古今 一ととて 三つて 三つて 三つて 三つて

○又くは 或 扱 文の端々也 世文は二度よりす

○二このや 花あさるさへよ 是は董 時

○今わりの奇 是も 柏木也 巴 扱 するさへん

○物とて ぬい 未 いた 女 祝 するさへん

○結語とて 正 鮎 する也

○とらんとし 虫の花 白氏文集 第十四 紅 駿 自 紙

○目 閑 着 生 蟲 魚 なるのさへ 有 不 心 経 年

○不 展 也 虫 是 也 三 不 分 也

○細 文 月 用 入 文 也 月 用 入 文 也

○河 川 年 也 あり

○或 扱 舟 我 命 也 あり

○や あり

○ゆりうらふ 弄 柏木 今とのやとるれは三宮

○巴 楳の懐妊の夕 柏木は巴 臨終よめ久し

○ゆりうらふも 弄 世三宮の尼は成りつる也

○とうのわとの河 蒼顔見鳥跡 始て文字とほ

○ゆりうらふ 弄 柏木也 細いほど久し

○花古今 一ととて 三つて 三つて 三つて 三つて

○又くは 或 扱 文の端々也 世文は二度よりす

○二このや 花あさるさへよ 是は董 時

○今わりの奇 是も 柏木也 巴 扱 するさへん

○物とて ぬい 未 いた 女 祝 するさへん

○結語とて 正 鮎 する也

○とらんとし 虫の花 白氏文集 第十四 紅 駿 自 紙

○目 閑 着 生 蟲 魚 なるのさへ 有 不 心 経 年

○不 展 也 虫 是 也 三 不 分 也

○細 文 月 用 入 文 也 月 用 入 文 也

○河 川 年 也 あり

○或 扱 舟 我 命 也 あり

○や あり

○ゆりうらふ 弄 柏木 今とのやとるれは三宮

○巴 楳の懐妊の夕 柏木は巴 臨終よめ久し

○ゆりうらふも 弄 世三宮の尼は成りつる也

○うちへまひん 或棟上の祠よき入内物忌もあまね
世宮のまやかんしうひひんかんありし昔也
○んやのまきんよ 弄世宮のあま也

○んちひて 孟 延とよまよひんかん
○まふうい 孟 世三官と柏木とのまよと董のま
ねんちひてと董の心也

○んちひて 孟 延とよまよひんかん
○まふうい 孟 世三官と柏木とのまよと董のま
ねんちひてと董の心也

